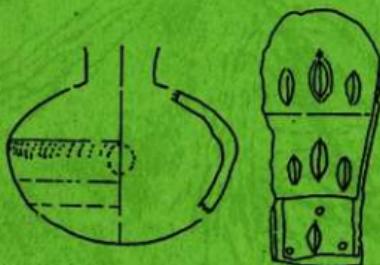


竜王町の遺跡

竜王町遺跡詳細分布調査報告書



竜王ニツ塚 2号墳の須恵器・鉢馬具

1988 (S.63)

山梨県中巨摩郡竜王町教育委員会

目 次

目次	例言
はじめに	1
1. 竜王町遺跡調査のいきさと経過	2
2. 竜王町の地形と沿革	3
3. 竜王町の遺跡調査研究小史	5
4. 赤坂台古墳群	8
5. 竜王町の遺跡概要	14
6. まとめ	16
竜王町遺跡地名表	17
写真図版	
竜王町遺跡地図	

例 言

1. 本書は、山梨県中巨摩郡竜王町全城の遺跡・埋蔵文化財の詳細分布調査報告書である。
2. 分布調査は、1987（昭和62）年度文化財保護事業として、竜王町教育委員会が国・県の補助金を得て行った。あわせて過去に採集・調査された中村泰氏、相川和弥氏・武田神社の所蔵遺物を収録した。
3. 分布調査ならびに遺物・記録の整理作業は、竜王町教育委員会の依頼にもとづき、次の者が参加した。十賀駿武（山梨学院大学教授・日本考古学協会委員）、西山雪江・中村泰・深沢謙次・斎藤清・相川和弥・備仲臣道（竜王町文化財保護審議会委員）、伸沢貞次・佐藤忠治・西野八十六・岡田基直（竜王町文化協会郷土研究部）、赤沢正規・花形幸雄（郷土史家）、内田裕一（山梨県考古学協会）、横田知之・土橋昇・奥石英俊・皆川洋・渡辺克敏・森豊健次郎・本元正治・和田弘行・斎藤努・中村雅博・橋本浩一・本田徹次・松川拓史・金沢良彦・伊藤紀夫・我妻良一・長崎深志・柳原高明・三好章夫・丸茂正・神保東洋彦（山梨学院大学考古学研究会・学生）、大坪重子・大芝美和（同会・短大学生）、古屋里絵（同会・山梨大学生）、坂本奈緒子（同会・山梨英和短大学生）、テラインフォメーション・エンジニアリング渡辺広勝事務局・橋本喬一（社会教育課長）、木村富貴子（社会教育係長）、小宮山謙二・保延克教・坂本和代・西山好美（社会教育係）
4. 本書は、十賀駿武が執筆し、山梨学院大学考古学研究会学生の協力で十賀が編集した。
5. 分布調査の記録・遺物は竜王町教育委員会が保管している。
6. 本書の作成にあたって次の方の協力を頂き、厚く感謝する。文化庁記念物課・山梨県教育文化課・山梨県立考古博物館・武田神社・山梨県考古学協会・山梨学院大学・竜王町テクノボリス推進室・竜王町農業協同組合・中村泰・相川和弥・新海仁夫・畑大介・渡辺広勝・西山雪江・赤沢正規・備仲臣道・新津建・田代孝・末木建・柴辻俊六・佐藤八郎

はじめに

竜王町は県都甲府市に隣接するため、ベッドタウン化の様相が強くなり、人口増加は県ドームにランクされており、人口動態から見るとき昭和30年に比べると昨年現在で実に4倍に膨れあがっている状況にあります。また環境的には甲府盆地のはば中央部に位置し、信玄堤で有名な釜無川が流れ、町のキャッチフレーズに象徴されるようにまさに「水と緑の町」であります。

各種の開発事業等も人口増加とともにふえ、埋蔵文化財の保護についても今日に至っては手おくれの感をいなめない現状であります。

本町の遺跡・埋蔵文化財を代表して、赤坂台古墳群があります。赤坂台地には、昔30基以上存在したといわれる古墳があり、現在なお形を残しているものは数基しかありません。時代は6世紀から7世紀の古墳時代後期の豪族の墓であると言われ、この地方の有力者達が甲府盆地東部の国造の葬制にならって築造したといわれるものでいずれも横穴式石室をもつ円墳です。

昭和52年中央道用地になった二ツ塚古墳の発掘調査では馬具、飾金具、刀子、ガラス玉、土器などが発掘されました。

今回、赤坂台地を中心に町内全域にわたる遺跡分布調査を町文化財保護審議会委員、山梨学院大学考古学研究会に依頼し、新たに約60カ所遺跡等が発見されました。今後、テクノポリス等開発に伴いスムーズな開発と文化財保護を両立させるためにも意義ある資料となることを切に希望するところであります。

最後に今回の調査に協力していただきました町民の皆様、調査員の方々に厚く御礼を申しあげ序にかえさせていただきます。

竜王町教育委員会

教育長 西山 賢吾

1. 竜王町遺跡分布調査のいきさつと経過

山梨県中巨摩郡竜王町に所在する狐塚古墳2号墳について、町指定史跡の範囲を確認し、学術的意義を明きらかにし、文化財の保護措置を講じたいのでと、調査の依頼を受けたのは、1985(昭和60)年度のことである。この調査は竜王町教育委員会が主体となる初めての埋蔵文化財発掘調査であり、竜王町狐塚古墳発掘調査団を編成し、次の参加者のもとに1986(昭和61)年3月22日～4月2日の9日間に発掘・測量作業を行った。

狐塚古墳発掘調査団 団長西山賛吾(町教育長)、副團長西山雪江(町文化財保護審議会会長)

調査委員 土橋健一(新町一区区長)・奥石智・大森道雄・相川和弥・塙川宣正・奥石健也・

西野八十六(町文化財保護審議会委員)・佐々木正夫・水上正夫・奥石恒治(町民俗資料館運営委員)・椎名慎太郎(山梨学院大教授)・赤沢正規・畠大介(学識経験者)

調査主任 十菱駿武(山梨学院大助教授・日本考古学協会)

調査補助員 横田知之・土橋昇・奥石英俊・秋山貴絵・望月真山美・皆川洋・本元正治・和田弘行(山梨学院大考古学研究会)・木崎道昭(都立大学考古学研究会)・伊藤慎二(国学院久我山高校)

事務局長 橋本喬一(町教育次長)、事務局員 鶴田陽一・木村富貴子・小宮山謙二(町社会教育係)

この結果、狐塚2号墳は直径12m高2mの円墳で、1～3mの周溝があつておらず、少量の上器片をトレーナー間溝・墳丘から発見した。測量図面の作成を主にし、墳丘表面の精査、横穴式石室の発掘・精査を残した。その後、狐塚2号墳の第2次調査は、当面町史跡として保存されており、緊急の発掘調査の必要性もないため、保留された。

1987(昭和62)年度になって国・県の補助事業として、竜王町全域の遺跡詳細分布調査が予算化された。竜王町は町全域の遺跡分布状況の把握が不足しており、今後の町内土地利用を考える基礎資料が必要であった。とりわけ、甲府地域テクノポリス構想の一環として、竜王町北部の赤坂台地に情報処理学校サンテクノカレッジ・産業団地計7haを造成する「イノベーションパーク竜王計画」が昭和62年度に決定し、63年度から着工を予定することになった。そしてこの計画を拠点に、ハイテク関連企業・研究施設・高級住宅地を誘致し、赤坂台地計100haを1995年を目標に開発しようとするものである。赤坂台地は桑などの畠8割・山林1割・宅地1分という利用状況だが、火山灰土で養蚕以外の転作不能地であることから荒廃し、残土や産業廃棄物の捨場と化している所もあり、有効な土地利用を竜王町および上地所有者は求めてきた。ところが赤坂台地には古墳群が分布しており、古墳以外の集落跡・遺物散布地も予想された。そこで町全域の遺跡分布を確認し、テクノポリス構想や土地開発に対して文化財保護対策を事前に立てることが企図されたのである。

遺跡詳細分布調査は1987(昭和62)年7月16日～23日、12月21日～23日の11日間にわたり、山梨学院大学考古学研究会、竜王町文化財保護審議会委員、町文化協会郷土研究部員総勢40名が全域の畠・宅地・山林を踏査し、記録をとった。調査は町の大字ごとにA～Kの区域に分け、2班で畠・宅地・山林を歩きまわり、遺物を採集し、地上の構築物を発見し、写真・見取図の記録をとるも

ので、あわせて道祖神・庚申塔など石造文化財も記録した。夏季に竜王町南部・中部を、冬季に北部を対象にした。また地名や伝承、既存出土品についての聞き取りもあわせて行った。野外作業期間中、我々が立ち入った畠や宅地で、農家からブドウやモモの暖かいものなしを受けたことを感謝する。

野外作業終了後、1987年12月下旬から1988（昭和63）年3月にかけて、竜王町北部公民館・山梨学院大学考古学研究室において、遺物整理・記録作成作業を行い、あわせて関係文献資料・地図・絵図の収集を行った。

参加者 十菱駿武（山梨学院大学教授・日本考古学協会委員）、西山雪江・中村泰・深沢謙次・斎藤清・相川和弥・備仲道（竜王町文化財保護審議会委員）、仲沢貞次・佐藤忠治・西野八十六・岡田基直（竜王町文化協会郷土研究部）、赤沢正規・花形幸雄（郷土歴史家）、内田裕一（山梨県考古学協会）、横田知之・土橋昇・奥石英俊・皆川洋・森脇健次郎・渡辺克敏・和田弘行・本元正治・斎藤努・金沢良彦・橋本浩一・本田徹次・松川拓史・中村雅博・伊藤紀夫・我妻良一・長崎深志・柳原高明・三好章夫・丸茂正・神保東洋彦（山梨学院大学考古学研究会・学生）、大坪重子・大芝美和（同会・短大学生）、古屋里絵（同会・山梨大学生）、坂本奈緒子（同会・山梨英和短大学生）

事務局 橋本喬一（社会教育課長）、木村富貴子（社会教育係長）、小宮山謙二・保延克教・坂本和代・西山好美（社会教育係）

2. 竜王町の地形と沿革

竜王町は、北緯 $35^{\circ}39'$ 東経 $138^{\circ}31'$ に位置し、山梨県の中央部、甲府盆地の北西端にあたる。町の西境に釜無川が南流し、西は八田村、白根町、北は敷島町、双葉町、東は甲府市、南は昭和町と接する。東西3.4km、南北4.8kmの町域で、面積12.87km²、人口33,000人の町である。

町北部は茅ヶ岳山麓の台地の末端で、赤坂台地と通称される。標高350mから300mまで南東に向かって傾斜する丘陵地で、茅ヶ岳火山の安山岩火砕流・火山泥流（菲崎岩層流層）を基礎に、茅ヶ岳ローム層が表層を覆う地質である。赤色火山灰土の台地に、甲府から諏訪へ向う信州往還道（甲州街道）が通っており、赤坂と古くから呼ばれ、赤坂稲荷神社が坂道の中間に立つ。赤坂台地は桑と果樹の畠地であり、一部に山林と宅地がある。

町中部と南部は平地で、標高290mから265mまで南へ緩く傾斜している。ここはかつての釜無川氾濫原であり、砂礫を中心とした河川堆積物（上部礫層）が厚く覆っている。平地の中に標高280m前後の微高地（=釜無川・田御動使川の自然堤防堤）が篠原、西八幡、富竹新田の集落にあり、宅地や畠地として利用されている。平地の地質は灰色・黄褐色の砂質壤土であり、1~2m以深は厚い砂礫と粘土層が全体にわたっている。現在、町域を流れる河川は、釜無川とその分水である西祖母川が、竜王から西八幡、玉川へ流れ、町域の東境を竜王新町・名取・富竹新田へ、黄川が流れている。

このような地形的特徴から、「篠原が丘」とも称された赤坂台地が竜王町住民の発祥地といわれ、古墳群の存在がその手がかりと認められてきた。文献上では、平安時代の「倭名抄」にみられる巨麻郡の一角に含まれると考えられるが、古代の郷名は伝えられていない。平安時代末の1176（安元2）年の八条院目録にみられる「篠原莊」は篠原が丘を中心とする竜王町周辺が皇室領の莊園

となっていたことを示す。中世には、「猿原郷、西山郷、奥石郷、八幡郷」の郷名がみられる。西山郷に1489年開基された慈照寺の境内には、龍王水と名づけられた湧水があり、竜王の地名はこれに由来する。赤坂古地下の氾濫原の微高地上には、小集落が形成されていたことは、郷名からも推定しうる。

中世末の1557（弘治3）年完成した川除堤（信玄堤）はそれまでの釜無川氾濫原を耕地に変えた。竜王河原宿が起村され、免税地として移住者が続いた（甲州古文書）。また藤原八幡社領、西八幡の武田家臣山県昌景知行地、飯富氏館もみられるので、屋敷や集落形成も面的に広がっていたものだろう。

江戸時代に入り、1601（慶長6）年以降1750年代（宝暦年間）までの間に、徳川幕府代官により、荒地開拓＝新田開拓が進められた。「甲斐国志」にみられる巨摩郡北山筋に属する藤原村、竜王村、西八幡村、万歳村、龍王新町、富竹新町、巨摩郡中郡筋に属する玉川村の7カ村は江戸時代前期には成立していた。平地の村では水田の米作が中心で、微高地や赤坂台地では桑・煙草が栽培された。近代になると、甲斐国は山梨県と改称され、1875（明治8）年の行政区画変更によって玉幡村（西八幡村と玉川村）と竜王村（竜王、竜王新町、藤原、富竹新田、万歳村）が成立し、1878（明治11）年には2カ村は中巨摩郡に属した。1956（昭和31）年に竜王村と玉幡村が合併して、竜王町（竜王町）が成立し、1958（昭和33）年に敷島村の一部の名取を編入した。（以上の記述は、西山雪江1976「竜王町史」、柴辻俊六1984「竜王町」「角川日本地名大辞典19山梨県」による。）



図1 竜王町の位置と地形

3. 竜王町の遺跡調査研究小史

竜王町の原始・古代・中世・近世の遺跡についての地誌としての記述は、江戸時代からみられる。『甲斐国志』（松平定能1814）古跡部巨摩郡北川筋の項に、「西山郷 竜王村 古名ナリ。赤坂ノ台赤坂ノ南面ニ家居セリ。コレヨリ竜地下今井へ続クナリ。今ニ五輪石塔・古塚等石室モ六七基存シタリ。竜地ノ城ニモ一二基アリ。」と、赤坂台古墳群の石室と覚しき遺跡のことが注意されており、飯富氏居館のこととも触れられている。

明治年間には、甲府の牧師山中笑氏が1887（明治20）年～1893（明治26）年に遺跡を踏査し、龍王村慈照寺ワキ塚穴、龍王原塚穴の石室のスケッチと寸法が記録している（山中共古1926『甲斐の落葉』）。この古墳は赤坂台古墳群のうちの西山1号墳と狐塚古墳等にあたると思われる。また、東京帝国大学（1900）『古墳横穴及同時代遺跡発見地名表』に龍王村の古墳が収録されている。さらに『中巨摩郡志』（中巨摩郡連合教育会1928）では、信玄堤、飯富氏居址を史跡として収め、龍王新町村絵図（延享3年）には、信州往還赤坂の東西に2基の塚と二ツ塚と思われる3つの塚の絵が見られる。同教育会の赤岡重樹氏指導のもとに、龍王小学校の先生が赤坂台古墳群についての詳しい報告をしている。大野良明・依田金晴1936『龍王村猿原丘上の古墳群』『中巨摩郡郷土研究』では、猿原丘上に10数基の古墳が散在するとして、次の古墳をあげている。

- ふたん塚 西塚 赤坂上櫻林 円墳 周囲100m 石室（1.45×9×1.38m）出土品なし
狐塚 西塚の南西50m 円墳 周囲60m高3m 出土品なし
狐塚 慈照寺裏櫻林 円墳 周囲50m余高3m 石室（1.7×4.6m）
丸山 龍王原村上 円墳 周囲80m高5m 出土品なし
りょうめ塚 龍王原村上 2基 東塚壊滅 西塚周囲20m円墳 出土品なし
無名塚A 龍王四つ石上 壊滅 石槻のみ 出土品（轡、耳環、鉄鎌、釘、刀）昭和7年発見
無名塚B 龍王原村上 円墳 周囲40m高1.5m 発掘済
無名塚C 龍王四つ石上 発掘済 刀出土
無名塚D 龍王四つ石上 壊滅
無名塚E 龍王四つ石上 円墳 周囲100m 石槻
無名塚F 龍王慈照寺東 石室のみ残存（1.7×6.5×1.8m）出土品 須恵器提瓶・壺、勾玉3
昭和9年発掘

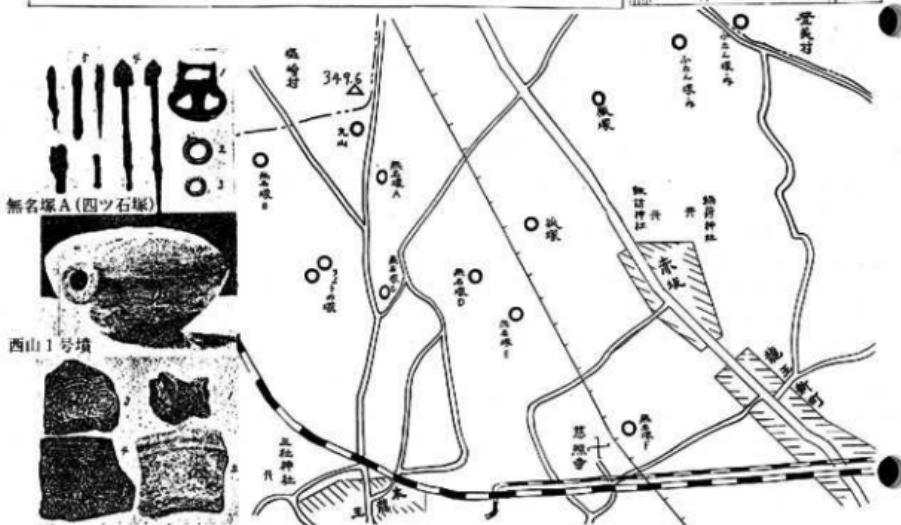
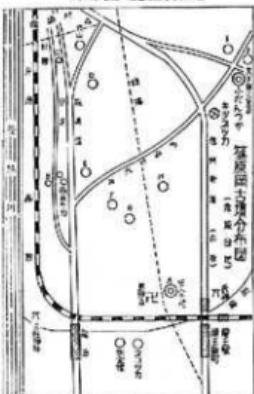
この後、「龍王村史」（龍王村1955）では、竜王村に現存する古墳17、記録のみの古墳10数として、「中巨摩郡郷土研究」にあげられた古墳以外に、本龍王の判家塚、ネコ塚をあげている。この結果は「山梨県遺跡地名表」（山梨県教育委員会1964）や埋蔵文化財包蔵地調査カード（山梨県教委保管1963調査）にまとめられた。

1977（昭和52）年7～8月山梨県教育委員会により、中央道建設に伴う竜王新町のふたん塚・竜王2号墳・竜王3号墳の発掘調査が行われた。竜王2号墳は外径14m高1.7mの円墳で、無袖形横穴式石室から、須恵器（环・壺・瓶・甕）上飾器（环）、帶金具、鉄鎌、手づくね上器、人骨が出土した。竜王3号墳は墳丘外径10m高1mの円墳で、無袖形横穴式石室から、須恵器（环

分布図「龍王村史」

図2

龍王の古墳図「甲斐の落葉」

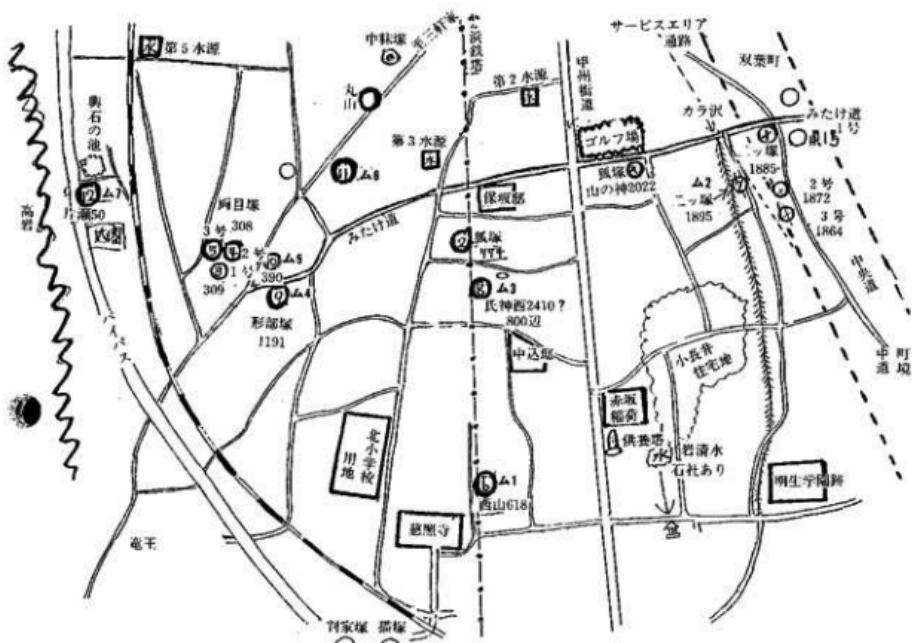


猿原丘の古墳分布図(「中巨摩郡郷土研究」より)

台付長颈瓶・甕)、土師器(壺・甕)、馬具飾金貝、刀子、直刀、鉄鎌、耳環、管玉、切子玉、勾玉、土製練玉、白玉、ガラス玉等を出土した。石室の形態と遺物の時期から、竜王3号墳は7世紀第2四半期、竜王2号墳は7世紀第3四半期頃と考えられた(末木健・伊藤恒彦・米田明訓1979「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—中巨摩郡竜王町地内—」)。この3基の古墳発掘調査は、竜王町の遺跡発掘の最初のもので、赤坂台古墳群の優秀な位置をあきらかにしたが、古墳そのものは消滅した。

その後、「山梨県遺跡地名表」(山梨県教育委員会1979)では、孤塚1号墳等10か所の古墳が登録され、「全国遺跡地図19山梨県」(文化庁文化財保護部1981)にも同一遺跡が図示された。

また竜王町教育委員会では町文化財保護審議会委員が赤坂台古墳等のパトロールを重ねており、西山雪江氏が古墳分布図を1978年に作成している。



赤坂古墳分布図

図3 赤坂古墳分布図

- 昭和53年西山雪江氏調査作成
例 ①昭37調査No. ○記録上の
もの 無名塚何号 数字地番
 ① ふたん塚 二ツ塚1885 西
藤福寿所有 周100m高5m
横穴式石室 原形保存(昭45
取こわし) 中央道用地内
 ② 狐塚 狐塚774 輿石康吉
有 周60m高4m 石椁有り
出土品上師器等の破片中村泰
藏
 ③ 両日塚1号 両日塚309
輿石正男有 周10m高1m
1m四方程の石あり小石で覆
われている
 ④ 両日塚2号 両日塚308
齐藤三九馬有 周12m高1m
大石3個
 ⑤ 両日塚3号 両日塚308

- 齊藤三九馬有 周15m高2m
大石あり
 ⑥ 無名塚1号 西山618 斎
藤敏夫有 石椁あり長4.4m
幅1.7m高1.2m石椁の大部分
は崩れているが4m程残って
いる。落ちた大石数個あり
 ⑦ 無名塚2号 二ツ塚1895
後藤文長有 原形なし 十師
直刀の残骸出土 後藤氏藏
 ⑧ 無名塚3号 狐塚800 (氏
神2410?) 中村豊造有
大石3個 周15m高1.5m 天
井石あり 横穴式石室あり。
復元可能
 ⑨ 無名塚4号 形部塚1191?
三沢文三有 形跡なし 1.0
×0.5mの石あり
 ⑩ 無名塚5号 形部塚390
- 保井昇有 形跡なし
 ⑪ 無名塚6号 四ツ塚713
清水次郎有 形なし大石1個
出土品童王寄贈 写真蔵
 ⑫ 無名塚7号 片瀬50 小池
喜幸有 大石あり
狐塚 山の神2022 野島義
八有 周60m高3m 出土獸
類の牙、穴あき古錢、焚火跡
昭12年養蚕組合取壊し
 丸山 丸山
周80m高2m 穫穴式石室
 二ツ塚2号 二ツ塚1872
径14m高1.7m 横穴式石室
 二ツ塚3号 二ツ塚1864
径10m高1m 横穴式石室
昭53年調査 中央道用地
 中林塚 中林
周30m高2.5m

4. 赤坂台古墳群

竜王町大字竜王・竜王新町・双葉町竜地にかけての赤坂台地には、約20基ほどの円墳が群集している。双葉町の二ツ塚1号墳、从塚2号墳、宇津谷無名墳、竜王町のふたん塚、二ツ塚2号墳、竜王2号墳、竜王3号墳の5基の古墳は、発掘調査され、中央道西宮線の路線敷となって、消滅している。ふたん塚古墳（竜王二ツ塚1号墳）は直径25m以上高5m位の円墳で、横穴式石室をもっていた。竜王2号墳（二ツ塚2号墳）は外径14m高1.7m、竜王3号墳（二ツ塚3号墳）は直径10m高1mの円墳で、いずれも無袖形横穴式石室をもち、7世紀前半～末の造営による古墳である。これらの古墳には詳しい報告があり、現存の古墳と未収録の消滅した古墳について、今回の分布調査と西山雪江氏らの調査カードによって、まとめておこう。

狐塚1号墳（図4No.2・図5）

竜王字狐塚774、775番地に所在する。信州往還の西側、みたけ道の南側、高圧線鉄塔に隣接した雜木林・畑に現存し、標高333.9m。調査カードによると、周囲60m高4mのおわん形の畠で、石楠の土台石の一部が残されている。現状の墳丘はやや南北に長い円形で、南北23m×東西19.5mであり、推定直径24m、高さ2.7mとなる。墳丘の中央が少し凹み、安山岩石が数個露出している、横穴式石室の側壁石と思われる。石室の推定長5.5m幅1.5mであり、天井石と側壁と奥壁の上部の石は外されているが、下部は良く残存していると思われる。主軸方向 N E N

狐塚1号墳の出土遺物は中村泰氏が所蔵しており、土師器高坪1と須恵器大甕の破片20個ほどである（図6）。これらの遺物の示す年代は7世紀後半～平安である。

狐塚3号墳（図4No.9）

竜王字狐塚770-5番地に所在し、狐塚1号墳と2号墳の間にあり、泥流の1つの尾根筋に並んでいる。桑畠の中の荒地として残っており、現状は径5m位高0.5mで、本来の墳丘はもう少し大きかったと思われる。石室の存在は不明であり、出土遺物はない。

この他、狐塚2号墳の南30mの字狐塚804-1番地で、道の改修に伴って、刀子が1点単独に出土している。年代は古墳時代後期～平安時代のものとみられ、小さな円墳か石室があった可能性がある。

新町狐塚（図4No.14）

竜王新町字山ノ神2020番地にあった。周囲約100m高5m、丘上には赤松の大木が多数生えており、上部は平坦だったという。『中日摩都郷土研究』では周囲60m高3mとなっている。1937（昭和12）年頃養蚕組合により開墾され、消滅した。出土品は、穴あきの古銭数枚、獸類の牙（長4cm位）1点、火を燃した焚火跡であったという。記録、遺物とも残存しない。

この新町狐塚は石室と副葬品の存在が知られておらず、貨幣と焚火と牙という出土品からみると中世～近世の密教の修法に利用された塚でもあった。

へび塚古墳（図4No.16）

竜王新町字二ツ塚1895番地にあったと伝える。現在は中央道の側道とカラ沢塚の間の桑畠（後

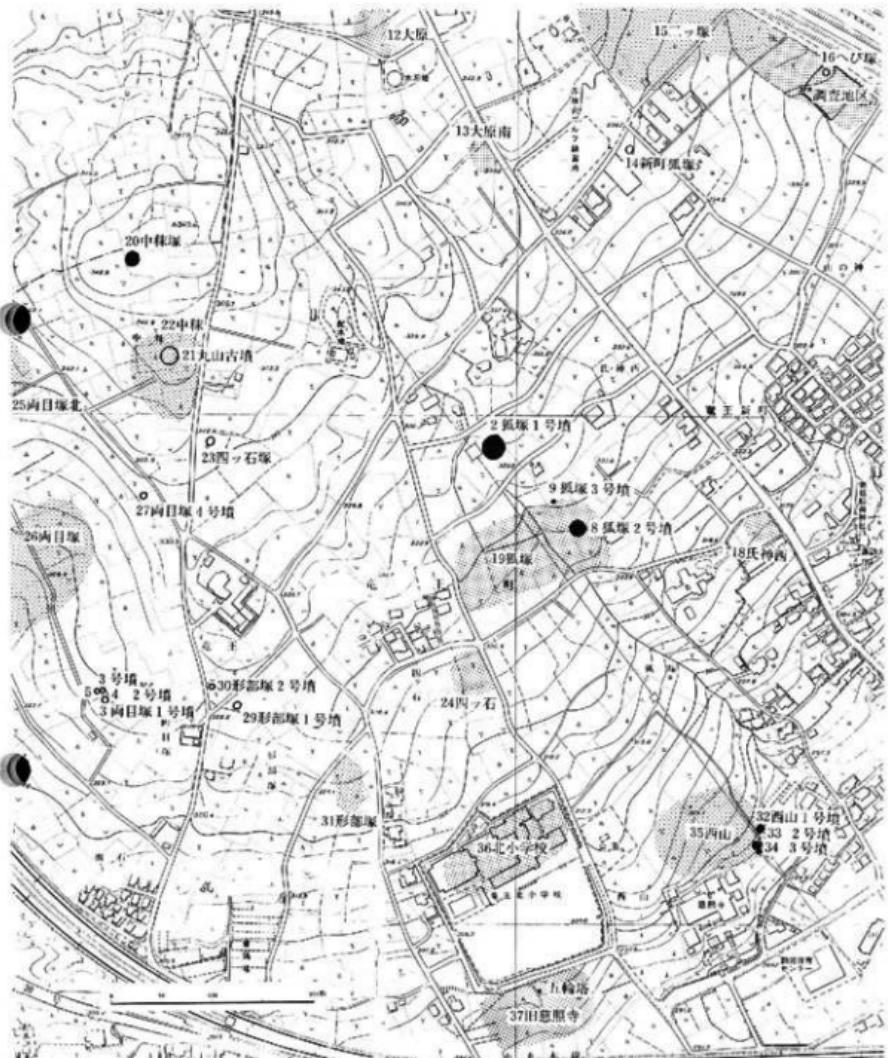


図4 赤坂台古墳群分布図

藤文長氏所有地)になるが、墳丘の痕跡はない。1936(昭和11)年頃の赤坂台開墾によって消滅した。墳丘の規模等不明で、上師器と直刀の残骸を後藤文長氏所蔵。西山氏調査の無名塚2号。

このへび塚古墳は二ツ塚支群のうちの一つで、古墳時代後期であろう。

字二ツ塚1891-5、1891-6番地の桑畑に安山岩と花崗岩の石塊が石室状に埋没している地点が2か所みられた。泥流中の自然石塊ともみられるが、古墳の石室である可能性を残している。

西山1号墳(図4 No.32・図5)

竜王字西山618番地に所在する。狐塚支群のある尾根に属し、標高298m。「中臣摩都郷上研究」の無名塚F、西山雪江氏調査図の無名塚1号にあたり、西山古墳とか慈照寺東古墳とか通称されてきた。慈照寺の北東100mで、道の東側、高社線の真下に、墳丘は2/3が残存し、横穴式石室の大部分が残存し、露出している。齊藤敏夫氏所有地の畠。太平洋戦争中の1944(昭和19)年頃、墳丘外形・石室とも完全であったが、古墳の北東から東側にかけて土取りされ、玉幡飛行場へ運ばれたため、5mほどの高さの崖となった。その後、段々に東北部が崩壊し、1955(昭和30)年頃には石室の奥の方に穴があき、奥壁や天井石の一部が崩落して、崖下に転っている。

墳丘は現状で南北6.5×東西8mで、高1.5m位、石室の間隔が雜木の根に守られて残っている状態である。本来は直径10m近い円墳であったろう。

石室は全長5m幅1.1~1.2mで、無袖形横穴式石室と思われる。奥壁石(117×120cm)は現在は転落している。天井は4つの大石でおおわれている。羨門は幅123cm、高160cm位で、床の一部を土が覆っている。石室の主軸はN-18°-Wで、南南東に開口している。

出土遺物は、1934(昭和9)年に石室の周囲を開拓した時出土し、須恵器提瓶と甕の破片(図2の「中臣摩都郷土研究」の写真)と勾玉3個があった。竜王小学校に寄贈、現在不明。この他、中村泰氏所蔵品に西山古墳入口出土の須恵器大甕があり(図6)、7世紀後半と思われる。いずれも古墳時代後期のものであり、大甕は、墓前祭の折に埋没した遺物と思われる。

以上の石室と遺物の特徴から、7世紀代の古墳である。石室の崩壊防止の措置と保存・復元の緊急の必要度が高く、竜王町教育委員会・文化財保護審議会では史跡指定と公有地化の道を検討している。

西山2号墳(図4 No.33・図5)

竜王字西山617-2番地に所在し、慈照寺境内の竹林中、標高297mの赤坂台南傾斜面に位置する。これまで古墳であることは知られていなかったが、今回の分布調査1987年12月に新発見し、既知の西山古墳を西山1号墳とし、新発見の2基を西山2号墳、3号墳と称することにした。

西山2号墳の略測では、墳丘の南北径14m×東西径11mで、東端が慈照寺東側の道路拡幅工事で少し削られたため、本来は直径14m、高2.3mの円墳で、周囲に幅1m位の周溝と思われる凹地がめぐらっている。石室が墳丘のやや北寄りにあり、安山岩で全長4.5m、羨門部幅2.2mで組まれ西側壁の一部が露出していた。主軸は南南東に開口する。天井石が3個、墳丘の南側に動かされていた。いつの頃か、庭石等に移動しかけてそのまま放置したものだろう。

石室を清掃した折、現代の獸骨を採集したが、他に出上遺物はない。

西山3号墳(図4Na34・図5)

竜王字西山617-2、615番地に所在し、慈照寺境内の竹林中、標高296mの赤坂台南傾斜面に位置する。新発見の古墳である。

地ぶくれ状に高まっている墳丘の略測では、南北6.1×東西5.5m高0.5mとなり、直径6m位の円墳となる。石室の一部が露出し全長4.25m幅1.6m程度の横穴式石室となる。天井石が1個移動されて、南東側にある。周溝の存否は不明だが、西山2号墳と接しているので、規模がこれを上回るものではない。出土品はない。

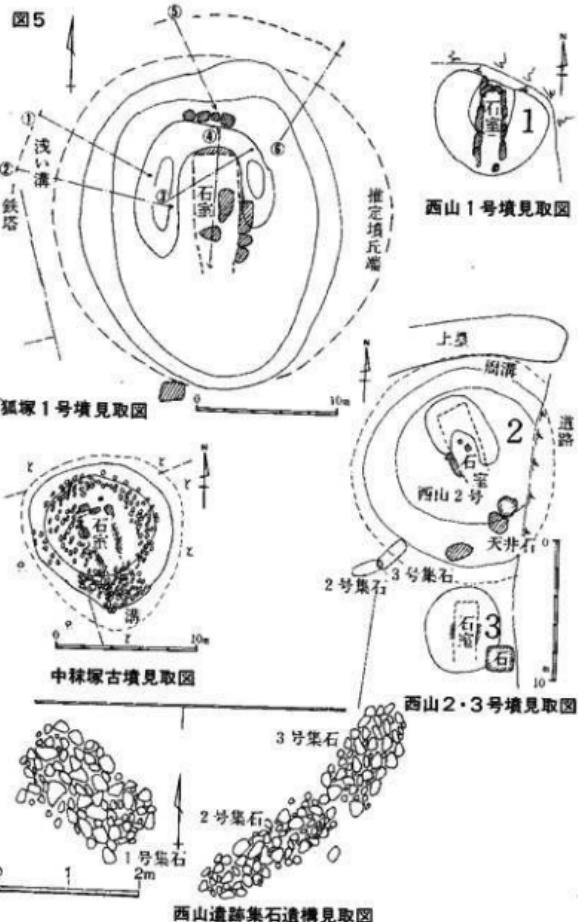
以上、3基の古墳以外に、1936(昭和11)年以前に、西山1号墳と並んで、1基の墳があったが、国鉄鉄道工事の際破壊されて墳滅したと記されている(中巨摩郡郷上研究)ので、4基が西山支群の古墳群をなしていたことになる。

四ツ石塚(図4Na23)

竜王字四ツ石713番地の桑畑に所在した古墳であり、「中巨摩郡郷上研究」の無名塚A、西山氏分布図の無名塚6号である。みたけ道交点から北へ200m、東へ15mになり、石室の一部であった大石が残存していたというが、現状は全壊している。出土品は図2写真のように、馬の骨1、金銅製耳環2、五角形の尖根鉄錐2以上、鉄釘1、刀1が、1932(昭和7)年地主清水次郎氏により発掘された。現在所在不明。

中株塚古墳(図4Na20・図5)

竜王字中株369番地の荒地に所在し、周りを桑畑と雜木林に囲まれている。双葉町域にある三角点(349.6m)の南になり、赤坂台地の最高位に近い標高349mに位置する。墳丘は南北13.5m×



東西12m、高2.3mの円墳であり、周囲に幅0.9~2m、深0.6m位の周溝もしくは根切溝がめぐっている。墳丘表面に径20~50cmの安山岩礫が多く覆っているが、礫の断面には褐色土が露出しており、南裾に礫がとくに多く集積しているところをみると、周辺の烟からの石を寄せたもので、積石塚古墳ではない。石室は奥壁と側壁石の上端が露出していて、天井石はない。横穴式石室の全長5.1mで玄室幅1.5m、羨道幅1.3mを測り、やや狭くなる。出土品はなく、保存状態は良好であり今後の調査と保存の必要な、古墳時代後期の円墳である。

丸山古墳（図4 No.21）

竜王字中秣345番地付近に所在し、赤坂台地の最高位に近いなだらかな尾根の南へ出た標高346m位の位置にあった。『中巨摩郡郷土研究』では、周囲80m高5mの円墳であったと記されるが1962年の分布調査では平地となっている。1m四方の石があり、石室の痕と思われるが、痕跡等ない。

形部塚1号墳・2号墳（図4 No.29・30）

竜王字形部塚399~5番地付近に所在していて、御岳道の南の桑畠に1×0.5m位の大石が残存しているのが、形部塚1号墳（西山氏分布図の無名塚4号墳）である。

竜王字形部塚390付近に所在していて、御岳道北側になるのが形部塚2号墳（西山氏分布図無名塚5号）である。『中巨摩郡郷土研究』の無名塚Cがこの塚にあたり、当時数年前の開墾で、刀が出土したと記されている。

小字形部塚に所在した古墳は現在石がある程度で明確な墳丘は発見できなかった。

両目塚1~5号墳（図4 No.3~5, 27 図6）

竜王字両目塚309番地に所在したのが両目塚1号墳で、赤坂台地西斜面の標高329m位にあたる。かつては桑畠の中に周囲10m高1mの墳丘が残存し、小石が積んでいた。

竜王字両目塚308番地付近に所在し、1号墳の北西隣の桑畠に、周囲12m高1mの墳丘があり、大石3個露頭していたのが、両目塚2号墳である。

同番地の同じ桑畠で、周囲15m高2mの墳丘がかつてあり、大石が露頭していたのが、両目塚3号墳である。292番地という説もある。

字両目塚245番地付近に塚（両目塚4号墳）、字両目塚199番地の第5水源用地内にも塚（両目塚5号墳）があったと西山氏の調査カードにあり、中村氏蔵の裏・蓋（図6）は5号墳付近で採集された。両目塚の小円墳群は現在は消滅している。

片瀬塚

竜王字片瀬50番地の赤坂台地西縁にあたり、中央線とバイパスの間、興石の池の南西30mにある。大石が割れて露頭していた塚（無名塚7号）といわれる。

判家塚

竜王字判家塚にあったとされる塚で、「竜王村史」に、四ツ谷から本竜王上宿に出る道路沿いにあり、最近まで塚状を存したが、今は開墾されて全然痕跡を失っているとある。判家塚の小字に

あたり、塚の位置は明治初年の分図図により竜王1181番地と推定される。

ネコ塚

『竜王村史』に、判家塚から東方数10歩、新町に通ずる野道に沿ってあり、塚上は均らされて畠地となっている、とある。ネコ塚も、小字判家塚の内にあたるが、位置は不明である。

このほか『竜王村史』によると江戸時代の御検地水帳に、竜王村内に「塚田筋、ごり塚、こりんつか、こりもつか、くわい蔵塚、判家塚、刑部塚、重蔵塚、北石塚」があり、竜王新町に「穴塚、へび塚、狐塚」の小字をあげており、現存しない塚・古墳を再発見できる可能性がある。

古塚古墳

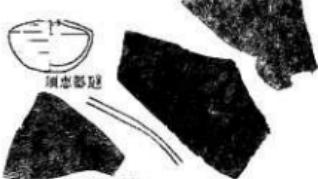
竜王にある古墳として『山梨県遺跡地名表』『全国遺跡地図山梨県』にNo10円墳として載っている。これ以外の文献なく、遺跡地図上の位置からは、判家塚と同じものを示しているのではないかろうか。

「形阿塚」出土品(図版)

甲府市武田神社の宝物殿を1987(昭和62)年秋に山梨県立考古博物館の田代孝氏と早大の柴辻俊六氏が鉄製品・文書の調査をした折、収蔵品の中に赤坂台の古墳出土品が発見された。早速これを借用して、記録調査した。

本出土品は長方形の木箱に「龍王郷赤坂形阿塚探掘之三品 刀劍曲玉矢根 献納米山朝太郎 明治二十八年一月十日五日探掘」と墨書きで箱書きされて、納められていた。竜王町赤坂台の「形阿塚」という塚で、1895(明治28)年1月に発掘された古墳副葬品である。ところが「形阿塚」という塚名は見当らない。形部塚か判家塚の誤記か音違いと思われる。# = 形であり、形阿塚と読み、形部

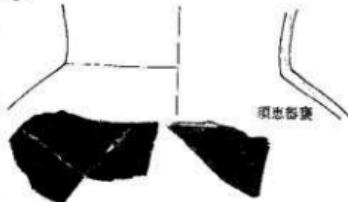
狐塚1号墳



両目塚5号墳(第5水源地)



西山1号墳



赤坂台地表面採集

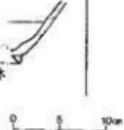


図6 赤坂台地採集土器(中村泰氏が昭和初期から戦後まで調査収集したもの)

塚の可能性が濃い。竜王町役場での調べでは、米山朝太郎氏は、龍王村60番戸に大正8年まで戸籍があったので、実在していたが子孫や記録の行方はつかめなかった。現在のところ、赤坂台の古墳で発掘した出土品を米山氏が保管しており、米山氏宅移転の折に創建したばかりの武田神社に寄贈したものと推測する。

直刀 全長77cm幅3cmのもの、全長43cm幅3cmで、目釘をもつもの、現存長42cm幅2.4cmの刀身から柄にかけてのもの、の3点。

刀子 全長27cm幅2cmで、柄金具のあるもの

鉄鎌 部分欠損品を含め72点。片刃形、尖頭形などあり、全長12cmで、尖根のものが多い。

以上の鉄製武器のみで、箱書にある勾玉は現存しない。古墳時代後期のものとしてよいだろう。

5. 竜王町の遺跡概要

原始・古代

竜王町全域の遺物散布地で、縄文時代や弥生時代にさかのほる遺跡は皆無だった。このことは赤坂台地に湧水地がなく、集落をつくる立地条件に欠けていたことによると思われるが、泥流堆積物や釜無川氾濫原に原始時代の文化層が覆われている可能性もあり、今後の発見の可能性はある。

古墳時代の遺物散布地は、大原北遺跡、両日塚遺跡、狐塚遺跡などである。赤坂台地に古墳時代後期には集落が形成されていたことが推定される。寅川ぞいで近接する敷島町金の尾遺跡は弥生時代後期から集落が営まれているから、赤坂台地の微高地に初期の農耕集落がまだ見つかるだろう。また、これまで赤坂台古墳群を経営した集団の集落は明きらかでなかったが、赤坂台地にその候補地の1つがあったといえるようになった。しかし、釜無川氾濫原である町域中部・南部には、平安時代までを含めて集落は形成されなかつたことになる。今後の発見・調査をまつ。

今回の分布調査中に墓地造成のため一部分破壊を受けて発見した。慈照寺境内の西山遺跡では、2基の円墳とともに集石遺構3ヵ所と上塁状地形を発見した。集石遺構は長径2~2.5×短径0.8~1.2mの長方形に、径10~30cmの安山岩と花崗岩の円礫が集まつたもので、腐葉土をどけた地表に発見された。遺物を伴わず、また集石下部におちこみがあるかどうかわからない。時期性格ともに不明だが、その形態と層位から、古代か中世かの集石墓ではなかろうか。(図5, 図版2)

中世・近世

町域北部の赤坂台地では、大原遺跡、二ツ塚遺跡、両日塚遺跡などで、中世・近世の土師質上器、陶磁器片を採集した。これら遺物散布地は、投棄場なり集落跡なりであろうが、このうち二ツ塚遺跡では根切溝を発掘確認した。さらに宇西山の旧慈照寺遺跡では、石造遺物五輪塔を採集したので、中世墓地跡であることが明確である。竜王新町の元免許遺跡では、近世と思われる礎石が発見されており、社寺跡が近くにある可能性が大である。

町域中部では、富竹新田と篠原の微高地に、散布地・社寺跡・館跡がある。

町域南部では、西八幡と玉川の微高地に散布地・社寺跡・館跡が発見された。

中世の城館跡として、篠原塙址、塙の内、飯富氏屋敷が記録されている(山梨県教育委員会1986「山梨県の中世城館跡-分布調査報告書」)。篠原塙址は、篠原字村中の八幡神社南側の平地

に所在し、堀跡が2ヶ所遺存している。180×200mの範囲にわたり、単郭式の屋敷跡か砦跡と思われる。玉川字堀の内の堀の内遺跡は、蓮生寺周辺の平地で、100×140mの範囲にわたると思われる。遺跡北側で五輪塔が出土しているが、築城者・時期は不明である。西八幡字法印村前に所在する飯富氏屋敷は、常照院の北側で、鎌田川の用水路にはさまれた宅地に遺存する。飯富氏屋敷については、「甲斐国志」古跡部巨摩郡北山筋に記載されている。「飯富氏ノ居跡 西八幡村 疆界民戸ニ係リテ分明ナラズ。荒堀ワズカニ存ス、阿他屋堀ト云フ下水溝アリ、一蓮寺過去帳ニ延徳四年十二月廿八日聞一房八幡ノ飯富内卜見ユ、婦人ノ法名ナリ、比所ハ飯富氏数代ハ田壯ニテ兵部少輔自裁シテ後ハ山県右兵衛尉之ニ居ルコト西小松石宮ノ棟札ニモ見エ、龟沢ノ天沢寺ノ二氏ノ墳寺タル趣キナレバ、采地モ此ノ邊リニ在リタルナラン」かつ、「玉幡村誌」(赤岡重樹編1953)には、字法印村前小字北村地内の地域内に、数ヶ所の土塁、自然石の敷石、おたや堀と称する堀があること、僅かな底地が残っていることをもとに、戦国時代の飯富氏部小輔虎昌とその弟山県三郎右兵衛の屋敷跡と推定している。また新海仁夫氏蔵の「新海屋敷図面」(19世紀中葉・弘化2年?)にある屋敷地を囲む長方形の水堀と竹矢来・土塁の絵は、飯富氏屋敷の痕を示すものと思われる。遺構は現状では、堀の一部を残すにすぎないが、約170×120mの範囲にわたる単郭式の館跡と思われる。

このほか、蘿原の櫻俣遺跡からは五輪塔が出土し中世の墓地跡と思われる。礼慶寺跡、向玉院跡からも中世～近世の陶磁器片を採集した。

さらに竜王町で最も有名な史跡、信玄堤を遺跡として登録した。信玄堤は戦国時代武田信玄の命により、釜無川と御駒使川の治水のため、釜無川東岸の三社明神社前から玉幡村に至る長さ100余間、敷幅9～12間、高1～2間の本堤と、雁行状に突出する枝堤を含むものである。武田信玄の時代以降、江戸時代にかけて何回もの修築がされた堤防を遺跡として、扱っておく。たとえ



新海屋敷図面(新海仁夫氏蔵・1845年?)



信玄堤古絵図(保坂達氏蔵・1824年以前)

ば、「信玄堤古絵図」（文政7年改図、保坂達氏蔵）には、高岩から八幡内水門まで、一番堤から五番堤が描かれている。信玄堤は残念ながら史跡に指定されておらず、精密な測量調査も行われていないので、その推定範囲の河川敷を広く考えておくことにしたい。

6. まとめ

竜王町遺跡詳細分布調査の結果、町域の73遺跡の種別と時代別は次のようである。

遺物散布地36 古墳25 寺院跡5 神社跡3 墓地跡3 館跡3 塚2 堤防1

縄文0 弥生0 古墳時代31 古代3 中世20 近世43

これらのうち、赤坂台古墳群をめぐる歴史的課題が大きい。竜王二ツ塚2・3号墳出土の飾馬具は7世紀代に大和王権から地方の武人に分与された高級品であり、甲斐國巨麻評のこの地域が律令国家体制の一端に組み込まれるようになったことを示す。赤坂台古墳群に葬られた氏族は、これまで空白に近かった竜王・双葉地域に新たに配された武人層である可能性が強いから、王生氏、物部氏、漢人系、波来系氏族のいずれかの可能性がある。このような赤坂台古墳群の謎解きをふくめて、まだ全体像はつかめてないし、墳墓と集落や生産の場との関係も解けてない。

今回の分布調査は、テクノボリス開発構想を契機として、文化財保護の対策を講じるものであった。今後、赤坂台の40haに、工場団地・研究所・文化施設を設ける計画が、具体的に進んでいくことになるのであるが、既存の遺跡はできるだけ全面的に現状保存されることを望む。墳丘が残っている古墳の保存と、散布地・集落跡の完全な調査を進めるためには、専門職員の採用と文化財保護行政の体制の充実が待たれる。先行的な史跡指定と保存・復元によって、赤坂台の文化的価値も高まるはずである。将来的には、県立または町立の歴史系・自然科学系博物館を赤坂台に設け、周辺の自然・史跡・名勝とともに、山梨の歴史と自然を学習する野外博物館としても活用できるはずだからである。狐塚古墳・二ツ塚遺調査・資料収集でお世話いただいた竜王町関係各位に感謝をするとともに、今後の町文化財保護行政の進展に期待をかける次第である。

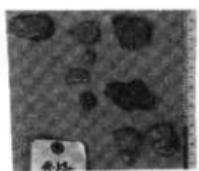
(十菱 駿武)

竜王町遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	所 在 地	時代	風 様	遺 物	備 考
33-1	ふたん塚古墳	古 墓	竜王新町字二ツ塚 1884・1895	古	円墳 径 30 m 横穴式 高 5 m 石室		消滅 「中日摩都郷土研究」
2	狐塚 1 号墳	古 墓	竜王新町字774・775	古	円墳 径 21 m 横穴式 高 3 m 石室	土器器・高杯・須恵器	「中日摩都郷土研究」
3	西目塚 1 号墳	古 墓	竜王字西目塚 309	古	円墳 径 3 m 石室		消滅 「中日摩都郷土研究」
4	南口塚 2 号墳	古 墓	竜王字南口塚 308	古	円墳 径 4 m 石室		消滅 「中日摩都郷土研究」
5	西目塚 3 号墳	古 墓	竜王字西目塚 308・292	古	円墳 径 5 m 横穴式 高 2 m 石室		「中日摩都郷土研究」
6	鹿王二ツ塚 2 号墳	古 墓	竜王新町字二ツ塚 1872	古	円墳 径 14 m 横穴式 高 1.7 m 石室	須恵器・土器器・骨董 具・鐵鍼・人骨	1977 発掘・消滅 「県中央道報告」
7	竜王二ツ塚 3 号墳	古 墓	竜王新町字二ツ塚 1864	古	円墳 径 10 m 横穴式 高 1 m 石室	須恵器・土器器・骨董 具・圓刀・刀子・鐵鍼 ・耳環・玉	1977 発掘・消滅 「県中央道報告」
8	狐塚 2 分墳	古 墓	竜王字狐塚 794・13	古	円墳 径 13 m 横穴式 高 3 m 石室	須恵器・土器器	町史跡 1986 調査
9	狐塚 3 号墳	古 墓	竜王字狐塚 770・5	古	円墳 径 5 m 高 0.5 m		
10	古 墓	古 墓	竜王字刑家原	古	円墳		地点不明
11	大原北遺跡	散布地	竜王新町字大原 2229	古	墳	土器器・鏡・瓦・土器 質土器・陶磁器	
12	大原南遺跡	散布地	竜王新町字大原 2247	近	戸	瓦片・茶器・陶磁器・ 土器質土器	
13	入原南遺跡	散布地	竜王新町字大原 2295	近	夢	茶碗・陶器	
14	新町遺跡	古墳・塚	竜王新町字山ノ神 2022・7	古墳・中近世	円墳 径 100 m 高 5 m	焚火址・骨・古鏡	消滅
15	二ツ塚遺跡	散布地	竜王新町字二ツ塚 2101・2 2100・5	古代・中 近	根切溝	土器質土器・陶磁器・瓦	
16	へび塚古墳	古 墓	竜王新町字二ツ塚 1895・1	古	墳	須恵器・土器器・圓刀	消滅
17	八幡塚遺跡	散布地	竜王新町字八幡 1812・1815	近	世	瓦・陶磁器・土器質土器	
18	氏神西遺跡	散布地	竜王新町字氏神西 2341	近	世	瓦片・陶器・陶器・土 器質土器	
19	狐塚遺跡	散布地	竜王字中林 782・794・797	古 代・中近世	墳	土器器・土器質土器・ 陶器・水晶	
20	中林塚古墳	古 墓	竜王字中林 369	古	円墳 径 12 m 横穴式 高 2.3 m 石室		
21	丸山古墳	古 墓	竜王字中林 345	古	円墳 径 10 m 横穴式 高 5 m 石室		大部分消滅
22	中林遺跡	散布地	竜王字中林 338・345	中近・近世		古鏡・土器・鏡片・ かわらけ	
23	西二ツ塚古墳	古 墓	竜王字西二ツ塚 713	古	円墳 石室	刀・鐵鏃・耳環・劍・ 馬具	1932 発掘 「中日摩都郷土研究」
24	西二ツ塚遺跡	散布地	竜王字西二ツ塚 644・11・12 636・637・1	近	世	茶碗・灯明皿	
25	南口塚北遺跡	散布地	竜王字南口塚 199・200	古	墳	須恵器・土器器	
26	南口塚遺跡	散布地	竜王字南口塚 236・239・288	古 代・中近世	墳	須恵器・陶磁器・土器 質土器	
27	南口塚 4 号墳	古 墓	竜王字南口塚 244・245	古	円墳		消滅
28	西月塚 5 号墳	古 墓	竜王字西月塚 199・2 第5木闌地	古	円墳	須恵器	消滅
29	季谷塚 1 号墳	古 墓	竜王字季谷塚 399・5	古	円墳		消滅
30	形部塚 2 号墳	古 墓	竜王字形部塚 390	古	円墳	刀	消滅

番号	遺跡名	種別	所 在 地	時 代	調 査	遺 物	保 考
31	形 塚 遺 跡	散布地	電王字形塚 414・411-1	近 世		陶磁器	
32	西 山 1 号 墳	古 墳	電王字西山 618	古 墓	円墳径 10 m 横穴式 円墳高 1.5 m 石 室	須恵器・勾玉	豊照寺東古墳 1934 発解
33	西 山 2 号 墳	古 墳	電王字西山 617-2	古 墓	径 14 m 横穴式 円墳高 2.3 m 石 室		
34	西 山 3 号 墳	古 墳	電王字西山 617-2・615	古 墓	径 6 m 横穴式 円墳高 0.5 m 石 室		
35	西 山 遺 跡	包含地	電王字西山 615・619・632	古墳～近世	集石遺跡 3		
36	北 小 学 校 遺 跡	散布地	電王字内山 632-3・565	古 墓		土師器・須恵器	「電王町史」
37	旧 鮎 神 寺 遺 跡	散布地 墓 地	電王字西山 554 付近	中 近 世	旧鮎神寺跡	陶磁器・土師質土器・ 瓦輪塔	
38	片 斜 墓	古 墓	電王字片斜 50	古 墓	石室?		
39	仲 田 遺 跡	散布地	電王新町字仲田 940・945	近 世		陶磁器	
40	元 先 許 遺 跡	社寺跡	電王新町字元先許 144	中・近 世	礎石		
41	東 裏 遺 跡	散布地	電王新町字東裏 470～472	近 世		土鍋・陶磁器	
42	大 森 附 遺 跡	散布地	電王字西森 2053	中 世		陶器・瓦	
43	信 支 挑	堤防跡	電王字一区一区三区・西八幡	中・近 世	木堤・運行堤		「中堅志」
44	中 河 原 遺 跡	散布地	名取字中河原 307・316	近 世		土師質土器	
45	下 河 原 遺 跡	散布地	名取字下河原 439	近 世		土師質土器	
46	伊 势 河 原 遺 跡	散布地	富竹新田字伊勢河原 1448	近 世		土師質土器	
47	中 耕 地 遺 跡	散布地	富竹新田字中耕地 429	近 世	法輪寺跡	陶磁器	
48	下 北 裏 遺 跡	散布地	富竹新田字下北裏 34・35	近 世		土師質土器	
49	大 明 神 河 原 遺 跡	散布地	富竹新田字大明神河原 1739	近 世		陶磁器・土師質土器	
50	東 耕 地 遺 跡	散布地	富竹新田字東耕地 590-1	江 戸		瓦・土鍋	
51	篠 原 墓 地	墓 地	篠原字村中 2817・2819	中・近 世	200×250 m 距止		「山梨県の中世城 跡」
52	木 明 寺 前 遺 跡	散布地	篠原字木妙寺前 128	中・近 世		土師器片	
53	伊 势 宮 跡	神社跡	篠原字木妙寺前 165	近 世	伊勢宮神社跡		
54	古 村 遺 跡	散布地	篠原字古村 186・188	近 世		土師質土器	
55	大 明 神 跡	散布地 神社跡	篠原字大明神 3122	近 世	大明神御効社跡	土師質土器・陶磁器・瓦	
56	古 村 東 遺 跡	散布地	篠原字古村 215・213	近 世		土師質土器・陶磁器	相川氏蔵
57	古 村 南 遺 跡	散布地	篠原字古村 257・277	近 世		陶器・土師質土器	
58	礼 麋 寺 跡	寺 跡 散布地	篠原字才ノ神 426	中・近 世		陶磁器・土師質土器・ 骨壺23	
59	新 居 東 遺 跡	散布地	篠原字新居東 301	江 戸		陶磁器・瓦・土師質土器	
60	柳 河 原 遺 跡	散布地	篠原字柳河原 657	近 世		陶器・瓦	

番号	遺跡名	種別	所 在 地	時 代	遺 墓	遺 物	備 考
61	向土院跡	寺跡	難波字櫻原 1775	近世	内玉院跡		
62	櫻原遺跡	散布地 里跡	難波字櫻原 1701 ~ 1703	中世・近世	ねすみ大神跡	五輪塔・土師質土器・陶磁器	
63	左宮寺遺跡	散布地	内八幡字左宮寺 35 金山 604	中・近世		土師質土器	
64	梅の木道跡	散布地	西八幡字梅の木 688	中・近世		陶磁器・土師質土器	
65	春安寺跡	寺跡	西八幡字法印村前 1025	近世	春安寺堂社		「玉幡村誌」
66	飯富氏屋敷跡	館跡	西八幡字法印村前 1005・1011 1018・1026	中世	草筋式館 200×150 m 土塁・敷石・おたや網		「『櫻付塚』 山形県の中世城 跡跡」
67	法印村前南遺跡	里跡	西八幡字法印村前 1137	中世	礎石群		
68	高札前塚	塚跡	西八幡字高札前 1782	近世?	厚延 3.5 m 高 3 m	須恵器?	
69	窓の内	窓跡	玉川字船の内 116 ~ 118	中世	一基残		「山形県の中世城 跡跡」
70	御崎神社遺跡	墓跡	玉川字船の内 213 ~ 2	中・近世	神社跡	五輪塔	
71	玉川鹿寺	寺跡	玉川字里ノ内 334 ~ 335	近世	浮脚古跡		「玉幡村誌」
72	判家塚	古墳	東王字判家塚 1181	古墳			消滅
73	本コ塚	古墳	東王字判家塚	古墳			消滅
74	霞堤	堤防	竜王・富竹新田	中、近世	信玄堤の副堤		
75	霞堤	堤防	篠原、西八幡	中、近世	信玄堤の副堤		
76	霞堤	堤防	西八幡	中、近世	信玄堤の副堤		
77	霞堤	堤防	玉川	中、近世	信玄堤の副堤		
78	霞堤	堤防	玉川	中、近世	信玄堤の副堤		
79	霞堤	堤防	玉川	中、近世	信玄堤の副堤		





西山遺跡・西山2・3号墳



西山1号墳・石室



西山2号墳石室



西山遺跡1号集石造構



直刀

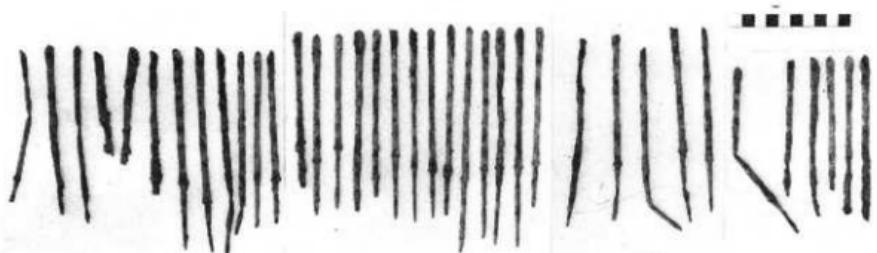


刀



刀子

直刀



「影阿塚」古墳出土品(武田神社蔵)

鉄錢

図版 3



旧慈照寺遺跡出土の五輪塔



東耕地道路



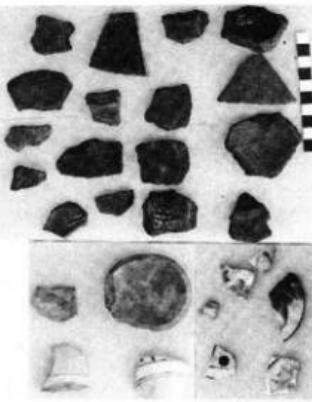
古村遺跡の陶器



元免許の龜石



礼慶寺跡と墓地



礼慶寺跡の土器・陶磁器



樺俣遺跡・ねずみ天神の五輪塔



樺俣遺跡・陶器



左宮寺遺跡の陶器・瓦

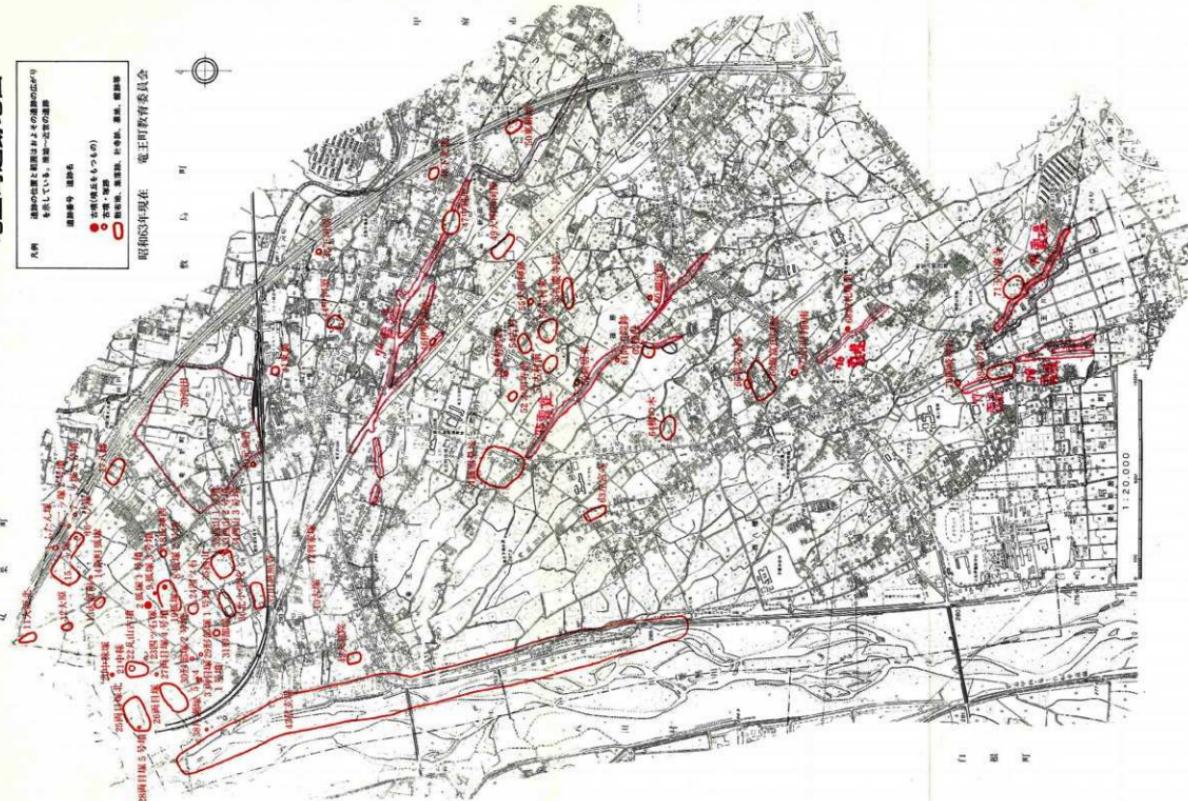
竜王町遺跡地図

八例 游歩の位置と斜面はどのような道路の広がりを示している。表面へまでの距離

● 古墳(後丘をもつもの)

○ 古墳・古跡
○ 古墳、古跡、石碑や塔、墓地、史跡等

昭和63年現在 竜王町教育委員会



竜王町の遺跡

—竜王町遺跡詳細分布調査報告書—
昭和63年3月31日発行

編集 山梨学院大学考古学研究会
十菱駿武

発行 竜王町教育委員会
山梨県中巨摩郡竜王町猿原2610
TEL(0552)76-2111#0
〒400-01

印刷 デザインオフィス ウィズ
山梨県甲府市大里町3727-4
TEL(0552)41-4242

